
Rゲーム

秋野 功成

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Rゲーム

【Nコード】

N3484B

【作者名】

秋野 功成

【あらすじ】

少し未来、人類は意識をネットへとリンクさせることが出来るようになった。だが、それに伴う弊害は・・・

ブローグ

ザンツ スバツ

何かが斬れる音がする。

硬いものではない。むしろ軟らかいものが斬れる音であった。

そう、斬れる音・・・

「ぎゃあ！」

一人が、剣によつて斬られた。

一刀両断といったところだろうか。剣は腹に食い込んだ後、全く留まらずに背中まで到達し、そして抜けた。

だが、悲鳴を上げ、腹を境に二つに分離された男には、鮮血は出なかった。

代わりに、0と1の数字の集合体と変化し、消えた。

・・・そう、0と1の集合体。すなわち

ここは、バーチャル世界。

—— 未来。それは世界の全てが「インターネット」という情報網でつながっていた。

だが、過去にあるデスクトップ型のパソコンの影は無く、全てが手中に収まるほどの小型化をされていた。

小型化のみならず、時には自分自身をパソコンにリンクさせ、意識を電脳世界へと送る事さえも可能になった。

つまりは、ネット世界への意識移動の可能。

やがて、それはもう一つの現実、仮想現実世界が出来上がる結果となった。

だが、もちろんそれに伴う弊害もあるのである・・・

「なあなあ、Rゲームって知ってるか？」

二人の男の子が、ランドセルを背負って楽しそうに話していた。彼らの後ろには、煌々としている夕日がある。もうすぐ日が暮れて夜となる前兆だった。

「Rゲーム？」

一人の男の子が、質問を質問で返す。

すると、最初に質問を投げかけた男の子は、得意げに答えた。

「知らないみたいだな。Rゲームって言うのは、ネットゲームだ」

「はあ・・・？」

その言い方じゃわからないよと言おうとしたが、得意げになった男の子の口からは次々と言葉が出てきた。

「——基本的にはビルがあつたり道路があつたりするから、時々どっちが現実なのかわからなくなるんだ」

意識を電腦世界へと飛ばせるようになった現代では、その仮想現実世界は別に不思議ではなかったが、どっちが現実なのかわからなくなると言うほどリアルだと言うのには、聞いた男の子も興味をそられた。

——そして、得意げな子供は、言葉を止めない。

「なんつーのかな？ほら、普通ネットなら現実と区別がつくようにあえて画像落ちじゃん？だけどソコは本当にリアルなんだよ」

「武器なんてもう最高。もう本物持つてるみたいでさ」

「しかも無料だぜ無料！何年ゲームやつても平気なんだぜ？」

聞いているほうの子は、だんだんと、あることを聞きたくてうずうずしていた。

すごい。面白そう。興味がある。だから・・・

そして、得意げな男の子の言葉が一瞬止まった時、その子——
守安 功二は聞いた。

「ねえ、それってどうやって遊ぶんの？」

01 守安 功一（前書き）

えー、遅れましたが一話目です。

誰かに「パクリだろ」とか言われますがパクリでは無いです。念のため

01 守安 功一

「ふあああ」

授業中、眠たげなくびをし、まるで猫のように背伸びをした少年は、机に頭をついた瞬間、即座に寝息を立て始めた。

だが、そんな瞬時の出来事も、先生と言うのは見逃さない。

「こら！守安！今は授業中だ！」

そして、御定番のような、チョーク・・・ではなく、黒板消しが、窓側の前から三番目の席、先ほど寝た少年の頭めがけて飛んだ。ばふっ。

黒板けしの中に溜まったチョークの粉塵が、たちまち教室中に舞う。教室の皆は咳き込んだ。

たった一人、黒板消しを回避して、床で寝入っている少年を除いて・・・

「すぴー、すぴー」

寝息を立てる少年は、寝魔ねまこと守安もりやす 功一こういちである。

「あー、スッキリだー！」

ぐっすり寝て、すっきりしているこの守安が、寝魔ねまと呼ばれるのには理由わけがある。

先ほど黒板けしを回避したように、彼には「寝入っても危険を察知して行動に移せる能力」があるらしい。

最初は、守安が寝ている時に、教室に入ったスズメバチが襲ってきたので、片手で叩き潰した事がある。

当然、守安は覚えていなかった。最初は皆にとぼけてんじやないの？と言われたが、先ほどのように何かが飛んできてでも避けるし、地震の時は、体が椅子から落ちて机に滑り込んだおかげで、窓際の花瓶が頭を直撃せずに済んだ事もあった。（花瓶の破片は机の周りにも飛び散った為、避けずに机に入るのが妥当だった）

そのため、寝ると魔物が取り付くんじゃね？などの言葉から、「寝魔」と呼ばれるようになったのだ。

だが、兼ねて寝魔の名は、「寝すぎ魔」の意味でもある。

「お前よく寝るよねえ。今日何時間寝たんだ？」

「ん、今日六時間授業だったから——六時間だ」

その守安の答えを聞いて、呆れ顔をするのは、守安の友達、清水^{しみず}明^{あき}である。

「なんだよ清水、その呆れ顔はさ」

「いや別に。ちよつと学力が気になったただけだ」

「お前のか？」

「いやお前のだ、守安。そんな寝てて学力は平気か？もうすぐ受験だぜ、かなりまずいんじゃないの？」

「・・・」

今は十二月——つまり三年生の彼等には、完全な地獄時期である。

「だ、大丈夫だ！家で勉強してっからさ」

「・・・俺が前にお前の家行ったとき、教材道具なんか一個も見当たらなかったが？」

「あー・・・」

守安の目が、上を向く。

そして彼はこう呟いた。

「雲ひとつ無い良い天気だなあー」

「雨降りそうじゃん」

守安の現実逃避は、清水にあっさり砕かれてしまった。

ザー　ザー　ザー

台風ではないにしろ、相当の大雨だ。窓には激しい雨が叩きつけられていた。

雷はまだ鳴ってはいないが、この分だともう少しで鳴ると言う感じであった。

だが、そんな中、守安は机に向かって猛勉強をしていた。

なぜなら、まずいんじゃないの？という清水の言葉は、やはり守安に大打撃を与えたようだ。

「うーん・・・」

慣れない自主勉強は、守安を困らせるばかり。

いつもは家庭教師となってくれる父親も、今日は母親と一緒に外出。

「俺は困っているって言うのに・・・二人でバカンスしやがって」
愚痴をこぼす守安。残念ながらバカンスではなくただの買い物である。

ザー　ザー　ザー

雨が強くなっていた。雷が鳴るのも時間の問題であった。

——ふと、守安は目線を違う方向へ滑らせる。

「・・・」

目線を滑らせた先は——現実逃避用のゲーム。

当然それはパソコンゲームである。TVはあるのだが、自身をリンクさせて「体感」できないTVゲームというのは、五年前から既に廃止されている。

その常時身に付けていられるはずの腕時計をかたどったパソコンは、守安から数メートル離れていた。そして、電子ロック付きのガラスケースに収まっている。

そう、これは自分自身を戒める^{いまし}ためだ——自分に甘えずに、自分に厳しく・・・

——何があってもあれに触れてはいけない。ノルマを達成し、勉強に励む事こそが自分のためになるのだ！——

「よし！諦めるぞ！」

そう言っ、守安が手にとったのは、シャープペンシル——
ではなく、いつの間にか電子ロックを外れている腕時計型パソコンであった。

「Reゲームへと接続。IDは——」

雷が鳴る。雨が強くなる。

心の弱さにつけこむ悪魔は、後に守安を地獄へと引きずり込んでしまう。

「・・・あれ？」

そして、守安は、自分の心の弱さなど気にせず、Reゲームに接続——は出来なかった。

「どーなってるの？」

ゲーム自体の調整やアップロードならば接続できなくてもおかしくは無いが、それなら必ず警告や何かがあるはずなのだ。

だが、なぜだがそれらしきものは何も無い。不思議だった。

もう一つの予想とは別に、PCの調子が悪いわけでもなかったようだ。現に自身のリンクは出来ている様子。始めにリンクしたときの視界——ポリゴンで出来たようなカクカクした建物が立ち並んでいる。その入口にはそれぞれ「検索」や「お気に入り」や「ゲーム」の文字があるのだ。これこそリンク成功の証。

だが、ゲーム等に接続できた時には、必ず「IDヲカクニンシマシタ」のように、古臭いカタカナ語が聞こえてきて、ステージを選択できる場所へと移動できるのだが、今回はそれが出来ないのだ。

「ふーむ」

守安は唸った後、一度リンクを外した。現実に戻ったような重力を感じる。

そして、この接続できない状況が自分だけなのかどうかの確認のため、友達に連絡をしようとした。

「電話を使う。番号は——」

携帯電話としても使用可能なパソコンに向かって守安は声を向け

る。

そして、ピルルルル、と、耳にそれほど痛くない発信音が鳴りはじめた。

だが——出ない。

「あいつ今日はPC^{パソコン}持ってないのか？」

それなら仕方ないな、と思い、守安はしばらく鳴っていた発信音を切り、他の友達にも電話をかけ始めた。

しかし——

「なぜ、だ？」

すでに五人ほどに電話をかけたが、誰も出ない。

一瞬、最悪の考えが浮かんだが、守安はそれを否定し、他の理由を考えた。

だが、どの理由も今の状況には値しない。

「まさか……」

最悪の考え……いや違う。絶対に違う。

そんなことを自分に言い聞かせながら、守安は「あの事件」を思い出してしまった。

——二年前

「意識は、戻らないでしょう」

とある市内の病院内の一室。

医者は、その一室の中で、それを言った。

そして、それを聞いた親は、ベッドで安らかに眠っている少年を見た。

親たちはとても信じられなかった。

なぜ？どうして？

事は二日前へとさかのぼる。

「ねえ？それってどうやって遊べんの？」

ワクワクした守安功二は、やっとの事でその言葉を発する事ができた。

その言葉を待つてましたと言うように、得意げになっていた少年は、すぐに功二にURLと接続方法。そして遊び方を簡単に説明した。

「んじゃ、今日の七時、かならずRゲーム来いよ。ルールはそっちで説明してやつからさ」

「うん、わかった」

そして、二人の少年は、それぞれの家へと帰っていった。

――夜七時

功二は、約束どおりの時間にRゲームをやるうとした。だが、つながらなかった。

親に原因を聞こうとしたが、父母共に仕事をしているため、まだ帰宅していなかった。

兄が家にいたが、その兄も早すぎる就寝にしていた。

仕方ない。と功二は思い、まずは友達に電話をかけた。が、出なかった。十人くらいかけたが誰も出なかったのだ。

やがて七時十五分を過ぎるようになってくる。焦った功二は、Rゲームへと再度接続を試みた。

――そして彼の意識は戻ってこなかった。

全ては聞き込みと接続履歴などによる推測であつたが、なんにせよ「Rゲーム」が関連しているのは確かだった。

すぐさま調査を開始したが、守安功二の意識は見つからず、やがて「意識消失」と決められた。

つまり、功二の意識がネット世界で消えた。ということで、Rゲームの会社自体が「停止」する事によって事は収まってしまった。

当事、守安 功一は十一歳であつた。
この日、功二と言う弟をなくした日であつた。

「まさか…確かに同じ状況ではあるけど…そんなはずは…」

確かにRゲームと言うのは、明らかに略名である。守安が今やろうとしているReゲームも略名らしい。

いや、共通点は名前だけではない。

一つに最初に接続が出来ないと言うこと。

もう一つ、時計を見ると七時五分、接続し始めたのは七時だつたと思われる。

そして最終的には連絡がつかない…

「…同じなのか…」

じゃあ、もう一度接続したら俺の意識は…功二と同じように——
しかし、これは功二を探し出すチャンスかもしれない——

「——死ぬのはゴメンだ」

少し躊躇^{ためら}つたが、守安はPCをベッドの上に投げ捨ててしまった。

——吹っ切れてしまった。

やがて守安は、机に上にあつたペンを手に取り、慣れない勉強を再会した。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3484b/>

Rゲーム

2010年10月9日06時20分発行